

新刊紹介

大河内了義著『異文化理解の原点』

須藤 訓任

題名にもある通り、本書は、たがいに文化を異にする人間同士がはたして本当に理解しあえるのかどうか、もし理解しあえるとしたら、その「原点」ないし最低限の必要条件とはいかなるものかという問いをテーマとしている。あらかじめ結論を先取りするならば、「異文化を理解するのは不可能だということ、少なくとも生易しいものではないこと」が異文化理解の「出発点」となるというのが、著者の考えである。この「いささかベシミステックな」結論は、『理解すること』には、理性や知識が関わることは勿論であるけれど、それ以上に、友情とか愛情とか思いやり（中略）という感情に関わる事柄ではないのか」（「あとがき」とすることから導きだされる。その導出の次第は、以下のような本書の構成のなかで展開される。

序章 私にはドイツが理解できない

第一章 相互理解の原点

第二章 異文化理解の試み——日本とヨーロッパをモデルとして

第三章 異文化理解の可能性——仏教の人間観を基礎として
結章 異文化理解の困難を越える道

まず序章では、豊富なヨーロッパ（特にドイツ）体験をもつ著

者の個人的経験から話が始められる。まだドイツでの留学生活もそんなに日の経っていない頃に味わった、否定疑問に対する返事の仕方がドイツ語（一般にヨーロッパ語）と日本語との間では逆になるということに起因する意志疎通の齟齬の事例が紹介され、それと対照的に、おたがいの母語を理解しない中国人留学生と漢文を通じてコミュニケーションしたという（ドイツ人からするなら驚くべき）エピソードが披露される（ただし、著者は、漢文的発想によって日本における外国語学習が歪められている可能性を指摘することも怠らない）。「抽象論や空論に陥ることを避けるために、人間を通して、あるいは書物を通して、私自身が経た具体的体験に即して論をすすめること」（二五頁）を方針とする以上、こうした興味深いエピソードが数多く散りばめられていることが、本書の特色のひとつであるが、いま挙げた事例によって著者は、異文化理解とはなにより言葉の問題であること、そしてそこにおいては、普遍性を願いつつ、それとの関わりにおいて自己の相対的存在性を自覚する事が肝要となり、「そういう意味での相対化を可能にするものこそ、『比較』という痛みを伴う知的営為であり、自覚過程である」（一九頁）と示唆する。この「比較」に関してはさらに、「環境問題、地球破壊、核兵器、原発、バイオテクノロジーによる生命操作、臓器とりわけ心臓の移植およびそれに伴う『脳死』の問題、南北格差、新たなナショナリズムの抗争等々」（資本主義も社会主義も共に未来への方向を見失ってしまっている今、私たちの日本は、このようなグローバルな重大問題に関していかなる対処の仕方を「すべきなのか、このことに関する「課題と責務とを明らかに」する「ための一つの有効な方法として比較文化論的考察が位置付けられるのではないか」（二四、

二五頁)と敷衍される。これらの文章には、本書における著者の姿勢ないし立場が明快に打ち出されている。なぜなら、異文化理解の問題を単にその問題としてだけ孤立させて取り扱うのではなく、現代世界の抱えているさまざまな深刻な問題との連関のなかから考察しようというところにこそ本書の狙いがあるからである。全四節からなり、分量からいって全体の半分近くを占め、その意味でも本書の中心部分といえる第一章は、序章での示唆をうけて、言葉を主題とする。「文化相対化の視点の確立」と題された最初の節では、異文化理解の試みにおいては自己存在や自文化の相対性の自覚が必須となることが確認されると共に、それを実際に遂行することの困難さが、ヘーゲルやとりわけ和辻哲郎「風土」(著者はその独訳者でもある)を素材として、委曲を尽くして論述される。和辻に関していえば、「家」制度や「家」的発想を他に見られぬ日本文化独自の特徴として顕揚する和辻は国家をも「家の家」として規定するが、そこに見られる天皇制の無批判な肯定の問題や、stateやStaatを「国家」と和訳してしまうことの問題性に対する和辻の無自覚さが指摘されて、論は第二節に受け継がれてゆく。その第二節「母語の特殊性の克服」はまず、「国語」や「母国語」という表記の問題点を明らかにし、「母語」「外語」という表現を使用する旨を述べた(それに応じて「日本語人」「ドイツ語人」という、耳慣れないが説得力のある言い方を著者は採用する。この言い方を著者は自分の子供から学んだという)あと、日本語を例にとつて、「主語のないこと」「人称代名詞のないこと」「能動・受動が『あいまい』なこと」など、その特殊性を挙げていき、それぞれの言語の特殊性によっていかに思考そのものが規定されるかを、その問題に関するニーチェの思想

を紹介しつつ、考察する。したがって、言葉が違えば、思考方法、発想の仕方それ自体もおのずと異なることになり、翻訳によるなら言葉の意味が必然的にずれてしまうというのが、第三節「翻訳の限界」の論旨である。そこではとくに「自然、Natura」という言葉が取り上げられ、Natura、natureというヨーロッパ語と「自然」という日本語ないし中国語の意味内容のずれが、それぞれの言葉の意味の歴史の変遷ともども詳細に説明され、それゆえ、後者を前者の訳語とすることが、いかに近似値的でしかなく、問題を孕むものであるかが、示唆される。だとするのなら、異文化同士の「対語の可能性」はどこに存することになるのだろうか。それが第四節のテーマである。そこでも著者の力点は、言葉というもの、およびそれと連動して、沈黙というものに對する西洋人と東洋人(日本人)の態度の相違に置かれる。すなわち、伝統的に人間を「ロゴス(言葉)をもつ動物」と定義してきた西洋においては、「言葉によつてはじめて人間は人間になる」と考えられ、それゆえ積極的に発言することに価値が認められるのに対し、「言葉を虚構とする仏教」を伝統とする日本にあつては「言葉の表現可能性についての諦め」とでもいえる態度があり、それがまた沈黙に重きを置かせている。そこからはさらに、能動的で積極的な西洋人に対して、受動的で消極的という東洋人の性格も導き出されてくるが、しかし、こういう根本的差異を押さえつつもお「語るにせよ聴くにせよ沈黙するにせよ、それらのすべてを成り立たせる唯一の基盤がある。それは端的に、人と人とは、自己と他とが、まっすぐに向かい合うこと、正帯すること、目と目を、顔と顔を合わせて直面することである。この基盤の上ではじめて、語ることも、沈黙することも、言葉となる。言葉なき言葉となる。

そのときにはじめて対話が成立する、少なくとも可能となるのではないか」と指摘されて、この節は、そして第一章は、結ばれる。

第二章においては、言葉以外の生活の場面でも、日本とヨーロッパとは基本的なものの感じ方・考え方がどのように異なっているかが検証される。組上に載せられるのは法感覚(第一節)であり、労働概念(第二節)である。前者に関しては、西洋では法は絶対的普遍的「正義」の表現と捉えられ、しかも正義は、結果的にいかなる事態が生じようとも、貫徹されるべきものと考えられている(そこからは「権利・義務」に対する強烈な意識も生まれてくる)のに、「喧嘩両成敗」的発想が強く「義理・人情」が重んじられる日本においては法は、結果を無視してまで守るべきものというよりは、あくまで「秩序保持の手段」にすぎないものとして規定される。また労働概念の相違については、ユダヤ・キリスト教の伝統のもとにある西洋世界は労働を、神に対する罪の結果下された罰として(ないしは、プロテスタンティズムに見られるように、神意にかなう唯一の手段として)捉えてきたが、東洋では、少なくとも「近代化」以前においては、仕事と遊びは明確には区別されず、究極的に一致するものとされ(「職人芸」とはそのことのひとつの表れである)、その意味で、労働は生きていることの証しでもある、と感じとられてきた。むしろ現代では、東洋も「近代化」が進んでその労働観も西洋化され、労働とは単に報酬を得るためだけのものではあって、自己を実現するのはむしろ余暇においてである、と考えられるようになってきている。とくに明治以来近代ヨーロッパを「無邪気・無批判」に取り入れてきた日本においては、こうした近代化の問題点が独自の先鋭化された様相で現われている。このことに對する問題意識はすでに

序章において表明されており、それは本書を貫く重要な縦糸のひとつともなるのだが、本章第三節「科学批判のさまざまな観点」にいたって、とくに近代科学のもたらしたマイナス面に焦点を絞って、その問題性が本格的に考究されることになる。

このようにして、異文化同士は、そもそもその基本的なものの感じ方・考え方が異なっているために、その相互理解は不可能といつてよいほど困難であることを明らかにしたうえで、著者は第三章および結章で、にもかかわらず相互の交流が不可欠にして不可避となっている現代世界において、異文化同士が「共に生きる道」として、仏教の人間観を、包括的人間理解のパラダイムとして提示する。その点からするなら、これらの章では、「人間の問題は人間を超えたところにのみ答えを見出すことができる」(一四四頁)と考える著者の哲学が展開されているともいえる。すなわち、仏教は、人間を衆生と規定し、そのことによって「人間中心主義からの脱却」(第三章第一節)を可能ならしめ、また、「完全な解放は生きとし生けるも、一切の衆生が共に解放されてはじめて可能になる」という菩薩思想に基づいて「個人主義・独善主義の超克」(第二節)へ向けて一歩を踏み出させ、さらに、生死を一如とする世界観に従って人間存在の「全体性の回復」(第三節)を実現させようものである、という。たがいの相対性の自覚を促して「異文化理解の困難を超える道」を指し示す、こうした仏教的人間観の唱導——日本のなものの考え方の弱点にも、西洋的思考法の偏向にも十分敏感になったうえで——とともに、本書は閉じられる。

(法蔵館、一九九五、二九二ページ)

(本学助教授)